

## D中学校

県南部にある各学年1クラスの小規模校である。同校は全国調査の数学において学力の向上が見られ、特に主として知識に関するA問題の伸びが顕著であった。

同校では、生徒の理解の程度（つまりき・弱点）を把握するために複数の手立てを講じ、課題克服に向けた取組を日々実践している。

### 学校全体の取組

「基礎学習教室」…1か月に1～2回、水曜日放課後50分間で実施。低学力傾向の生徒が対象で、家庭を訪問して保護者にも理解を求め、希望者を募る。国・数・英の教科ごとに開設している。5時限授業の水曜日に設定しているため、会議等で回数が限られており、継続的な取組につなげにくいことや、3教科とも申し込んだ生徒は、いずれか1教科の参加となることが多いことが課題である。

「復習教室」…定期テスト1週間前に2回、放課後50分間で実施。5教科で開設し、全教員が分担して指導する。

いずれの教室も学年を超えて教え合う生徒の姿が見られる。



授業以外の学び直しの機会をつくり、教員に気軽に質問したり生徒同士が教え合ったりできる環境を整えています。

全校体制で取組を進めることで、生徒の実態を共有し、指導に生かします。

### 基礎・基本の習熟を目指す数学科の取組

#### 1 復習のための「確認プリント」

復習のための「確認プリント」(図1)を作成している。「確認プリント」は、B5判1枚に計算・方程式・グラフ・三角形の合同条件など、基礎的な内容を自作で8問出題。全学年において授業の始め5分間で毎時間実施している。採点時には○×だけでなく、途中式や考え方などを書き加えて次時に返却している。そうすることで、どこで間違えたのか、何が分かっていたのかなどを生徒自身も確かめることができる。

#### 2 理解状況を把握するための「課題プリント」

定期テストごとのノート確認や、問題集確認だけでなく、約2週間に一度、B5判4枚程度の「課題プリント」(図2)を配布し、家庭学習として取り組ませている。期日を決めて提出

させ、教員がチェックし、間違えた問題や分からなかった問題は、確認プリントと同様に途中式や考え方を書き加えて返却している。また、間違えやすいパターンや記述の仕方について説明を加えることもある。

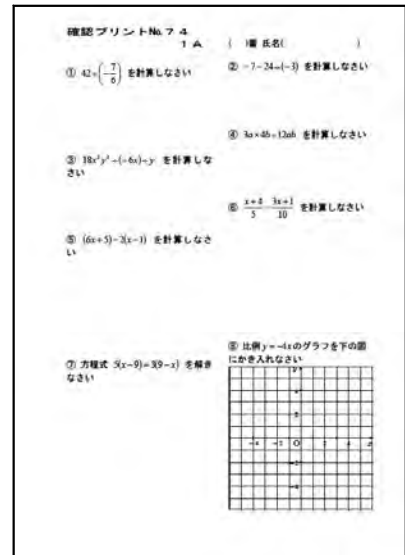


図1 確認プリント

### 3 課題を把握する手立て

生徒自身が、どのレベルの問題が自分の課題であるのかを確認できるように、定期テスト、実力テストでは、問題ごとの正答率を算出し、模範解答とともに配布している。

1年生では、入学間もない時期に「新入生テスト」(国語・算数・理科・社会)を実施し、生徒一人一人の理解の程度やつまづきの把握に努めている。併せて、副教材の復習問題(小学校内容)に取り組みさせることで、つまづきがより明確になる。また、授業方針の見直しにも役立てている。算数については、数学の授業の中で実態に応じた振り返りを行っている。

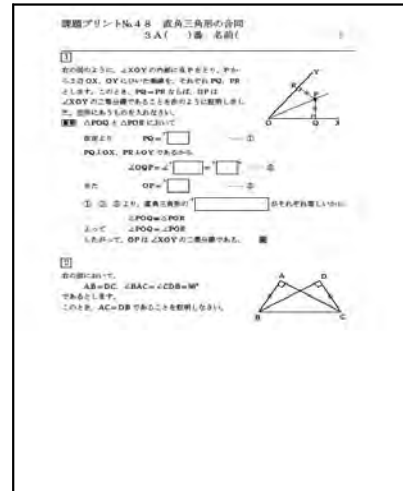


図2 課題プリント

### 4 課題を克服するための取組

生徒の多くがつまづいていると判断されるときには、その内容を授業で学び直すことにしている。平成28年度には、1年生で学習した「資料の活用」の内容につまづきが見られたため、2年生の3学期に学び直しを行った。

3年生の数学の授業においては、複数の教員による指導が行われており、生徒から積極的な質問がなされるなど効果が見られる。



生徒に自らのつまづきや弱点を理解させ、それらを克服するための、生徒一人一人に応じた小規模校ならではのきめ細かい取組が行われています。  
また、テスト結果を分析し、生徒に必要な力を的確に捉え、授業改善や学び直しに生かしています。  
達成感を味わわせながら基礎・基本の定着を図っています。

### 全国調査問題の活用

数学科については、2年生の3学期の期末テスト以降に、力試しとして、その年度の全国調査A問題、B問題に取り組みさせ、事後に丁寧に解説を行っている。



出題形式に触れておくことで、全国調査で数学の力をより正確に測ることにつながると考えています。  
また、解説によって、生徒自身の学び直しにもつながっています。

## E中学校

県中部にある各学年6クラスの中規模校である。全国調査では、平成27年度から平成29年度の3年間で、国語、数学ともに平均正答率や県偏差値が伸びており、学力の底上げが図られていることが分かる。

また、平成27年度から平成29年度における奈良県調査の結果から、国語では「話の内容を正確に聞き取る」や「話し方の工夫を聞き取る」こと、数学では「割合について説明する」ことに関する設問で、奈良県平均正答率を上回っていることが確認できた。

このような顕著な伸びが見られた要因について整理した。

### 学校全体で取り組む授業づくり

同校では、平成28年度から人権教育部を軸として、授業づくりに関する研修を進めてきた。具体的には、小グループの生徒同士で教え合いながら問題解決していくスタイルの授業を意識している。取組を始めて2年目となる平成29年度は、「すべての生徒の学びと居場所を保障する授業の創造」「協同的・対話的で深い学びのある授業の創造」を最重要課題として、各教科においてよりよい授業づくりを進めている。



平成27年度は年間2回だった職員研修を、平成28年度は8回とし、その内4回は授業研究を実施した。平成29年度は、全教員での授業研究を3回実施し、これ以外に全教員が授業を公開している。授業公開は、他の教員が自由に参観してもよいシステムになっており、若手教員にとっても有意義な研修の機会となっている。

また、全国調査の結果から、奈良県平均に比べて差が大きかったところや顕著なところを取り上げて整理し、全ての教職員で情報を共有する取組を行っている。

これら、よりよい授業づくりや研修に関する内容は、生徒・保護者・教職員に対する学校評価アンケートに取り上げ意見聴取するとともに、自己評価結果として公表し、次年度の取組に反映させている。



E中学校では、「授業づくり」を研修の大きな柱として、全ての教職員で共通理解しながら取り組んでいます。他教科・他学年の授業も積極的に参観して研修を重ねることで、よりよい授業づくりを進めています。

### 学びの意欲を高める「楽習部」

同校では、平成27年度（現在の中学3年生が入学時）より「楽習部」を立ち上げた。「楽習部」とは、一般的な部活動に準ずる扱いをする部で、放課後毎日活動をしている。楽習部では、放課後一教室に担当教員が常駐し、生徒が各自で持ってきた課題を行っている。教員は、主に生徒の学習面のサポートをするほか、使用するプリント等を提供する場合もある。

校外のクラブ（例えば地域の野球部等）で活動する生徒や、健康上の理由等で通常の部活動に参加できない生徒が楽習部に所属しており、学年は固定していないので、中学3年生が中学1年

生に教える場面もある。学級では活躍できない生徒も、楽習部の活動では下級生に教えることができる場面も見られる。

このように、楽習部は、学習面での支援を必要とする生徒のモチベーションを高めたり、コミュニケーションが苦手な生徒の居場所になったりする役割も担っている。



「楽習部」の設置が、学習支援が必要な生徒への具体的な手立ての一つとなっています。また、上級生が下級生に教えることができる場ともなり、生徒の学習意欲の向上につながっています。

### 国語科における「書くこと」の指導の工夫

現在の中学3年生は、入学時から国語科の教員が指導内容を二つに分けて指導する方法を実践している。具体的には、指導内容を国語A、Bに分け、二人ともが学年全ての学級を教えている。内容をAとBの二つに分けることで、教員が教材研究等にかかる時間が増え、複数の目で生徒の学習状況を見取ることができるメリットがある。国語科の二人の教員が話し合う機会が増え、生徒の様子や教材に関する情報交換を綿密にしている。

授業では、学校の課題である「協同的・対話的」な授業を意識しており、小グループで自分の考えを伝えたり、相手に説明したりする活動を多く取り入れている。その結果、全国調査の生徒質問紙では、「話し合い」に関する項目について、県平均よりも同校の肯定的回答率が高くなっている。

また、国語科の「書くこと」の指導においては、

- ①生徒が書きやすいテーマを設定する。
- ②白紙にしない、させないように支援する。

など、継続的な指導を工夫している。国語科の授業でおすすめの本のスピーチやポップづくりをし、図書委員会の取組として、本のポップコンクールを実施して、文化鑑賞会で発表する活動も行っている（図1）。

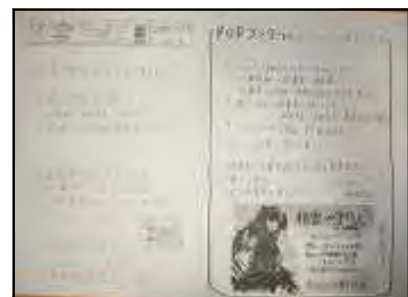


図1 図書委員会の取組



教員の得意分野を生かして授業の質を高めるとともに、情報交換を綿密にしながら効率的に授業を進めています。「書くこと」の学習では、粘り強く取り組むことを継続して指導していることが、無解答率の低さにつながっていると考えられます。学校全体で、生徒が評価される場を積極的につくろうとしている点も参考になります。

## F中学校

県中央部にある各学年4～5学級の中規模校である。数学における学力は3年前と比べ高くなっており、奈良県の平均正答率が上位県（秋田県・石川県・福井県）と比べて10ポイント以上差のある設問に関しても、全て上位県に劣らない正答率となっている。

国語における学力についても、3年前も県平均と比べ高かったが、ほぼ同様の水準を維持している。

同校では、3年前から研究部を発足させ、研究体制の見直しを行い、様々な取組を行っている。

### 研究体制の充実化【分析→共有→活用】

3年前に、教務部内の研究係を、研究部として校務分掌に位置付け、研究部が中心となって、研究主題を設定している。また、各部からの要請や、各教科、道徳等の授業研究の年間計画を立て、職員研修を進めている。第1、2学年の研究授業時には、当該学年以外の生徒を下校させ、全職員が授業を参観し、研究協議に参加する体制をつくっている。第3学年は授業公開期間を設けている。その際、授業者があらかじめ授業のポイント等について示した「参観シート」を作成し、参観者が書き込んで授業者に返すようにしている。

学力・学習状況調査の各教科については、それぞれの教科部会が分析したものを研究部でまとめ、職員会議で共有している。生徒質問紙については、研究部でグラフにまとめたものを、同じく職員会議で共有している。「各教科部等による分析→職員会議での共有→一人一人の教員が授業改善に生かす」という流れを大切にしている。



研究部を組織的に機能させることで、様々な取組を進めています。研究授業後の研究協議や学力・学習状況調査の結果を共有することで、一人一人の教員が日々の授業や指導に生かしています。

### 国語力を高める取組

毎朝、読書タイムを実施したり、ビブリオバトルを行ったりしている。また、読書紹介カードを全生徒が作成し、展示発表を行っている。

「書くこと」については、400字～600字の課題作文等を書かせて添削し、個別指導を通して能力の向上を図っている。

その他、漢字練習ノートで練習し、毎時間漢字テストを実施している。採点して返却した後は、間違った漢字を練習させ、ファイルに綴じるようにしている。漢字練習ノート、ファイルは定期的に回収して点検し、生徒が継続的に取り組んでいるかを把握している。



読書、「書くこと」、漢字など、課題となっているところに、重点的に取り組んでいます。毎朝の読書タイムは、その後の授業に、落ち着いて取り組むことにもつながっているようです。

## 数学科の指導について【考える力を育む】

課題によって、ホワイトボードを活用したグループ学習等を取り入れるようにしている。また、1年生からほぼ毎時間、前時の確認を中心とした小テストを行っており、確実な力の定着を図っている。2年生の数学では少人数指導を実施しているため、一つの学級を二つに分け、17～18人での指導を行っている。その際には、少人数指導の効果をより高めるため、教員同士の打合せを綿密に行うように心がけている。

1年生と2年生の夏と冬に、全生徒が「数学レポート」を書き、学級で発表している。日頃の生活や社会の中で感じた疑問について、数学を活用して解決しようというもので、最近では「バスを効率よく運行するには？」(図1)、「音楽と数学」(図2)、「数字で向き合う世界の食料問題」(図3)等をテーマとしたレポートが提出されている。優れたものは、代表として文化発表会で発表したり、コンクールに応募したりしている。数学的な思考力を培うとともに、表現力の向上にもつながると考えている。また、平成29年度からは数学検定の案内や呼びかけも行い、10月実施の検定には、35人ほどの生徒が参加した。

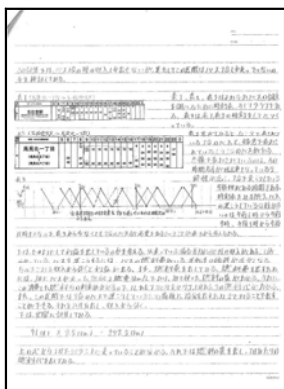


図 1



図 2

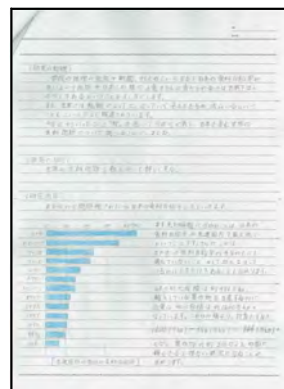


図 3



前時の復習を中心とした小テストで基礎学力の定着を図るとともに、考える力を育む「数学レポート」を作成させることで、生徒の知的好奇心が刺激され、チャレンジしようという気持ちが喚起されます。このことが、生徒の主体的な学習につながっています。

## 校長先生より

落ち着いた学習環境を整備することで、教員が教材研究をしたり、指導を工夫したりする時間の確保につながっている。教職員に、現在の落ち着いた環境を保ち、さらに伸ばしていこうというモチベーションが感じられ、チャイム着席や清掃など、「当たり前」のことが「当たり前」にできるようになる。指導にもつながっている。教職員が一致団結して生徒が楽しく学べる学校づくりに今後も取り組んでいきたい。



落ち着いた学習環境の整備は、生徒の学力向上とともに、教員が教材研究や指導の工夫にじっくりと取り組む余裕につながります。「当たり前」のことが「当たり前」にできる学校づくりの大切さを改めて感じます。